

使える英語プロジェクト NEWS

(第 16 号)

「英語を使うなにわっ子」育成プログラムⅡ

義務教育終了段階で、自分の考えや意見を英語で正確に伝える力を育成することをねらいに、平成 23 年度から「使える英語プロジェクト事業」として実践研究を進めてまいりました。今年度は事業最終年度になります。これまでの取組みの成果をまとめた「英語を使うなにわっ子」育成プログラムの活用を推進し、その普及を図ってまいります。



「英語を使うなにわっ子」育成プログラムⅡについて

平成 23 年 3 月に作成した「英語を使うなにわっ子」育成プログラムⅠに加えて、「英語を使うなにわっ子」育成プログラムⅡを作成しました。本プログラムは、「理論編」と「実践編」の 2 部より構成されています。

「理論編」は、平成 24 年度に実施したワーキング会議等の内容を踏まえて、指導のポイント、指導計画や評価の在り方などを示し、プログラムの考え方がわかるようにしています。「実践編」では、実践研究校からいただいた授業のアイデアをまとめています。
(下記 HP サイトでご覧いただけます)

<http://www.pref.osaka.lg.jp/shochugakko/erueigo/index.html>

平成 25 年度の研修予定

フォーラム及びワーキング会議を下記の日程で開催し、プログラムの普及に努めます。

- 5 月 27 日 (月) 使える英語フォーラム
「使える英語プロジェクト事業における小中連携とは」
講師：関西外国語大学 中嶋 洋一 教授
- 7 月 23 日 (火) 第 1 回 WG 会議 (中学校)
講師：関西外国語大学 中嶋 洋一 教授
- 7 月 31 日 (水) 第 1 回 WG 会議 (小学校)
講師：大阪樟蔭女子大学 菅 正隆 教授
- 11 月 18 日 (月) 第 2 回 WG 会議 (中学校)
講師：関西外国語大学 中嶋 洋一 教授
- 11 月 25 日 (月) 第 2 回 WG 会議 (小学校)
講師：大阪樟蔭女子大学 菅 正隆 教授
- 3 月 13 日 (木) 使える英語フォーラム
講師：関西大学 竹内 理 教授



* 日程等は変更になる可能性があります。

平成 24 年度「使える英語プロジェクト」フォーラム・WG 会議を振り返って

昨年度、「使える英語プロジェクト事業」の取組み内容の充実と事業成果の普及を目的として、使える英語プロジェクトフォーラムとワーキング会議を実施しました。

その概要について以下にまとめました。ここでの学びを、各学校の英語授業改善に、役立てていただきたいと思います。



◇「目標」にのっとった指導計画 ◇

- ・学校の教育目標を具現化するため、「学校の教育目標」と「教科目標」の関連を整理する。
- ・そこから「各学年の目標」、「各単元の目標」をバックワード（逆算的）に設定する。
- ・「どの段階でどんな力を児童生徒につけるのか、またそれをどのように評価するか」に考慮した見通しのある指導計画を作成する。



◇「指導と評価の一体化」◇

- ・生徒の学びを的確に評価するために、指導した内容で「生徒ができるようになること」を事前に整理する。
- ・テストは生徒が「本当に学んでいるか」を適切に評価できるものになっているか検証する。

◇「活用の時間」の授業づくり ◇

- ・「活用の時間」で英語を使う場面を設定することで、コミュニケーションに必要な語彙や表現をしっかり身につける指導（Input for output）の効果を高める。
- ・「活用の時間」に「相手意識」「場面意識」を設定した活動を取り入れ「何のために」英語を使うのかを意識するような仕掛けをする。
- ・生徒が「できた」「わかった」と実感する授業を行う。



◇「習得の時間」の授業づくり ◇

- ・生徒自身が学習の目的を理解し、その結果「自分ではできないのではないか」という自己効力感をはぐくむことが、自律的な学習者へと変容するきっかけとなる。
- ・従って、生徒にとって「意味のある活動」にすることが重要であり、それが生徒に高い動機づけを与える。

○これまでの実践研究の成果等について「英語を使うなにわっ子」ポータルサイトにアップしています。ぜひ、ご覧ください。 (<http://www.osaka-c.ed.jp/c04/index.html>)

学びングキャンパス@近畿大学英語村



平成25年3月28日（木）に、近畿大学英語村E³（イーキューブ）において「学びングキャンパス@近畿大学英語村」が実施されました。

当日は、約80名の小学校5・6年の児童が参加して、アメリカ、イギリス、オーストラリア等世界中から集まったネイティブ・スピーカーの講師の英語を聞きつつ、さまざまな体験活動に進んで参加していました。



最初は、はじめて会う外国人の講師に、ドキドキや緊張している様子の児童が多くみられましたが、体験活動が進むにつれて、自ら積極的に外国人講師に話しかけている姿を見ることができました。

特に、イースターエッグハントの活動では、児童のヤル気が最高潮に達していました。

この活動では、E³の中に隠されているウサギに似せたチョコレートを探し求めるもので、どの子どもたちも必死に探し外国人の講師からヒントをねだっていました。

体験的な活動を通じて、「分かった!」「通じた!」という自信から、英語でのコミュニケーション、異文化理解に興味が高まったと感じられました。

体験内容

- マッチ棒を使ったパズル
- 紙飛行機を遠くに飛ばす
- イースター エッグハント

イースター・エッグハントとは…?

復活祭（イースター）の休日等を祝うため、特別に飾り付けられた鶏卵を探すゲーム。元来染めたり、塗ったりしたゆで卵を使うが、現代では、チョコレートで作られた卵で代用するようになってきた。



編集後記

平成25年3月、文部科学省は、『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』を作成しました。現行の学習指導要領に基づいた、観点別学習状況の評価における「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」について、生徒が身に付ける能力を、各学校が明確にすることが求められています。

つまり、「英語で〇〇ができる」ことを確実に見取り、生徒への学習指導を行うことが必要となります。

校内の英語科教員全員が到達目標について話し合い、英語科として「共通のゴール」を持ち、「協働」していくことが大切です。